

『精神の現象学』における「意識」に関する試論

相良, 謙一

<https://doi.org/10.15017/1397689>

出版情報：哲学論文集. 20, pp.105-110, 1984-09-20. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

研究ノート

『精神の現象学』における「意識」に関する試論

一、はじめに

拙稿は『精神の現象学』の〔Einführung〕に定位して、「意識」(Bewußtsein)自身の在り方を注視しつつ、「学」(Wissenschaft)の可能性を見極めることを意図している。『精神の現象学』の〔Einführung〕は、哲学の課題を明らかにすることから始まるが、哲学の課題とは、「真実に存在するものの現実的な認識」(das wirkliche Erkennen dessen, was in Wahrheit ist)であり、「真実に存在するもの」¹⁾はまた「絶対的なもの」(das Absolute)とも呼び換えられる。ところで、『精神の現象学』においては、絶対者を構成することが問題ではなく、意識に即して意識の経験をただ見守り、これを叙述することが問題である。

相良謙一

より本質的に言えば意識の経験とその叙述それ自体が絶対者の認識であり、一つの「学」であるようなそのような叙述が問題なのである。ヘーゲルはかかる意義を持った一つの学を「意識の経験の学」とも呼んでいる。²⁾

ところで、しかしながら、学(真なる知)へと迫りゆく自然的意識の道程が同時にすでに学であるのはいかにして可能なのだろうか。現象知はいかにして必然的に絶対知に到達しうるのか。或いは、現象知が意識の経験の果てにおいて絶対知に到達するのはなく、むしろ意識或いは現象知自身がすでに何らかの仕方です体的に絶対知であると言いうるとするならば、それはいかなる意味においてなのか。或いは、このような言い方はそもそも意味をもちうるものなのか。ハイデッガーはその著「ヘーゲルの経験の

概念)〔森の道〕所収)において、「意識の経験の学 (Wissenschaft der Erfahrung des Bewußtseins)」という表題の中で、経験という言葉が強調されて中央に位置し、意識と学とを媒介している⁽³⁾ことに注目し、ヘーゲルが経験という言葉をこのように強調して用いるとき、何を考えているのかを問おうとしたが、自然的意識と学との間には一体いかなる事態が生じてきているのか。この問題をあらためて問い直すことが拙稿の課題である。

二、自然的意識の意識性

『精神の現象学』においては、意識が学の産出の主体であるが、連続する意識の経験の各段階において、意識は差し当たっては素朴な意識として、自然的定在の直接的世界或いは「臆見と偏見の体系」のうちに埋れて存在し、未だ自分の真なる存在を隠れなきさまにおいて顕わならしめてはいない。意識のこの様な自然的なあり方は「単なる知の概念」であるにすぎず、「実在的な知」ではない。

「自然的意識は単なる知の概念であるにすぎず、実在的な知ではないことが(叙述を通して)明らかになるであろう。しかしながら、自然的意識はむしろ自分を直ちに実在的な知と思いついでいるのであるから、(真なる知へと迫りゆく自然的意識の)道程はこの意識にとって否定的な意味をもち、(単なる知の)概念の

実現であるものは却ってこの意識にとっては自分自身の喪失となる。なぜなら、自然的意識はかかる道程において自らの真理を喪失するからである。」⁽⁴⁾(括弧内筆者補、以下同様)

ところで、現象知(自然的意識)の叙述において現象知(自然的意識)の非真理性が明らかとなるということは、この意識にとって自らの経験が「懐疑の道」、「絶望の道」であるということの意味するが、懐疑と絶望の道を歩み、現象知の非真理性を洞察する主体は果して端的に自然的意識そのものであると言いうるのであろうか。成程、この疑問は愚問かもしれない。「経験を重ねるのは実に素朴な自然的意識自身であり、また自分の対象が自分自身と同じく変わってゆくのを見るのもこの素朴な自然的意識自身である」⁽⁵⁾ことは自明のことと思われるからである。しかしながら、洞察の主体が自然的意識であることは自明であるにしても、自然的意識の何がそもそもそうであるのか。この点を明らかにするために、意識の目標について少しく考察していくことにしよう。

自然的意識の目標は、意識を真に意識たらしめている意識の実在・意識の意識性としての知の無制約的な自己確実性・即ち真なる知以外にはない。本来、意識とは或るものが知られて在ることという意味であるが、意識の経験のテロスである絶対知の境位においては、意識の知と存在が一つのこととして語られる。ところで、意識のテロスを我々が意識に対して定立してやる必要は全くなく、意識のテロスは意識自身のうちに意識のウーシアとしてす

でに存在しているとされる。

「意識は自ら自覚的に自分の概念であり、そのことによつて直ちに意識は制限されたものつまり自分自身を越えていくのであるが、意識にとつては個別的なものと共に彼岸（真なる知）が同時に定立されている。……意識は己れの制限された満足を打破すべしという圧力を自ら内発的に蒙るのである。」⁶⁾

以上のことから、「意識の経験の学」において哲学するという営みは、自然的意識の實在的意識（絶対知）への自己超越、或いは自然的意識の真なる自己への立帰りとして解釈できよう。ところでしかし、自己超越の主体である自己即ち意識を自然的意識と端的に言い切つてよいものか。むしろ、何らかの仕方、その自然性という限定性がそぎ落とされざるを得ないのではないか。換言すれば、自然的意識の「意識性」、或いは、自然的意識即ち自己であると同定可能な言わば「意識自己（意識そのもの）」⁷⁾とも呼ぶべきものが意識の自己超越の真の主体ではなからうか。そうであるとするれば、「意識の経験の学」とは、意識性或いは意識自己が自然的意識と實在的な知（絶対知）の中項として、そのつど両者を自分自身の内で自ら区別しまた同時に自ら関係づけながら、意識の存在性を知るといふ、ヘーゲルの術語で言うところの「媒介」の営みとして解釈できよう。またそのことによつて、自然的意識と学との間の深淵とも言うべきものも充たされ、まるでピストルから急に弾丸が飛び出すように自然的意識から一挙に学的世界へ

飛び出すといったシェリング的事態も回避できることになるであろう。このような意味において、現象知の叙述は「意識そのもの学への形成の歴史」⁷⁾であると真に言いうると思われる。ヘーゲルは、そのつどの自分と自分のテロスをを見透して自分のテロスへと迫りゆく意識そのものの在り方を「徹底的に完遂される懷疑主義」⁸⁾ (der sich vollbringende Skeptizismus) と呼んでいるが、(Skeptizismus)とは感官による知覚ではない、文字通り見透すこととしてのスケプシスを意味しているのである。

三、意識の経験の尺度、或いは 自然的意識の意識性

「現象知の叙述はただ現象知のみを対象として持っている⁹⁾のであるが、現象知の非真理性を明らかにし、真なる知即ち学への確固たる道を歩んで認識の實在性を遂行してゆくには、そのための方法、尺度が必要である。そしてその尺度は当然、真の尺度でなければならぬ。ところで、現象知のみを対象とする現象知の叙述に当たつて、叙述のための真の尺度は未だ存在していないように思いなすのが一般的な当然の見方であろうが、ヘーゲルはこの様な見解を「自然的表象」と呼んで、これが不合理、仮象であるときえ言い切る。

認識の吟味のための尺度の必要性は、絶対者の認識に先立つて

認識の批判的分析を要求する自然的表象が強く主張することであるが、ヘーゲルは自然的表象の不合理性を、認識を絶対者を我がものとする「道具」と考える言わば認識道具説と、認識をそれを通じて我々に真理の光がとどく「受動的媒体」と考える言わば認識媒体説の両方の方を考察することによって明らかにしている。その詳細な論述は此処では避けるが、少なくとも言いうることは、ヘーゲルは哲学における認識の批判的理論を完全に撤去しようなどとはいささかも思わず、近世哲学の基盤である意識に立ちつつ、新たな形での認識批判の理論、即ち、認識の批判であると同時に絶対者の認識であるような認識批判の理論を展開していることと考えていることである。ヘーゲルが尺度の選定に当たって問題としている様々の事柄もすべて、この新たな形での認識批判の理論の可能性に関わっている。では、この理論はどのように展開されていくのであるか。

ヘーゲルによると、吟味の尺度の選定に関して、自然的表象がなしたような懸念は無用であり、「意識が自分の尺度を自分自身において与える」とされる。この命題は、先に自然的意識と学との中間に立って両者の媒介作用⁽⁴¹⁾であるとした自然的意識の意識性⁽⁴²⁾或いは意識そのもの（意識自己）の作用と密接に関連していると思われるが、以降この点を明らかにしていかなねばならない。

ヘーゲルは自然的意識の二つのモメントである「知」と「真」が自然的意識のうちどのように現われてくるかを見ることに

よって、意識が自己吟味の尺度を持ちうることを明らかにしている。本来、意識とは、或るものが知られて存在しているということであるが、知の主体としての意識はそのつど或るものを知の客体として自己から区別しつつ、この或るものに知るといふ仕方⁽⁴³⁾で関係する。ところで、意識に対して知られて存在する対象は、更に知の主体としての意識によって、同時に意識自身から区別されて存在し、意識との関係の外に自体的に存在するものとして定立されてもいる。或るものは、意識に対して知られて在るもの即ち対象（Gegenstand）としては、意識の相関者であるが、意識はこの或るものを同時にそれ自体においても在るものとして、自分から区別するのである。此処で意識は或るものの自体的あり方を「真」と呼び、これを意識に対する対象の存在即ち「知」のモメントから区別するのである。

かくして、知の主体としての自然的意識は、自らの作用としての意識性において、自分と或るものを区別しながら同時に関係づけ、或るものを関係のモメントとしての知と、区別のモメントとしての真といった二つの在り方に二重化させつつ、更にこの二つの在り方を区別しそして同時に関係づける。他方、かかる作業において、意識の側も或るものを知る自分（いわゆる対象意識）と、そのような作業をする自分（いわゆる自己意識）に二重化させつつ、この二つの自分の在り方を区別しそして同時に関係づけているのである。

ところで、以上の事態から、意識の吟味は次の二つの仕方で行なわれることになる。

(I) 意識は対象についての自分の「知」が果して対象の自体(真)に一致するか否かを吟味する。

(II) 意識は意識に対して知られたものとして存在する対象が果して対象の自体に一致するかどうかを自ら吟味する。

しかし両者は全く同一の事態である。本質的なことは、「概念と対象・対他存在と自体存在の両契機が我々の探究しようとする知ることそのものうちに属していることを、探究の全体にわたって銘記する」ことであり、「我々は、意識が自分のうちで自体或いは真なるものとして言明するものにおいて、意識が自分の知を測定するために自分で立てる尺度を持っている」ということである。

ところで、もし知の契機と真の契機が一致しないとき、意識はいかなる態度をとるのか。当然のことながら、意識は自分自身を真ならざる知として廃棄し、対象の自体に一致するように自分の知の立場を自ら変更しなければならない。しかし、このように意識が自分の知の立場を対象の自体に合致させようとするとき、実は対象そのものの側も変更を蒙ることになる。なぜなら、意識は自分の知を対象の自体に合致させようとすることによって、実は対象の自体を対自化しようとしているからである。

こうして意識の自己吟味において、「対象は自体であることを

やめ、ただ意識に対してのみ自体である対象となり、この自体の意識に対する存在 (das Für-es-sein dieses Ansich) が今や真なるものである」ことが明らかとなるのである。従って、意識の吟味の尺度もまた吟味の過程において変更する。意識はそのつどの経験を始めるに当たって、差し当たっては対象の自体性に吟味の尺度を求めるのだが、吟味の過程を通して対象の自体性という吟味の尺度は対自化されるからである。それ故、「吟味はただ単に知の吟味であるにとどまらず、吟味の尺度の吟味でもある」のである。

ヘーゲルは、意識が自分に即してと同時に対象に即して遂行する以上のような作業を「弁証法的運動」とも「本来的な経験」とも呼んでいるが、およそ自然的意識にとって意識から学への展開が可能であるとすれば、意識に対してそのつど絶えず新たな内容が意識の外部から与えられるのであってはならない。むしろ作用としての自然的意識がそのつど対象と自分自身の在り方を吟味することによって絶えず自らの存在と対象の存在との本来的なるものへと立ち帰って、自分と対象の新たな存立の場を見透してゆくのでなければならぬ。ヘーゲルはこの事態を「意識自身の転回」(Umkehrung des Bewußtseins selbst)と呼ぶが、この様な転回をなす意識自身は素朴な自然的意識とは簡単に言いきれない性格のものであろう。此処で言われる意識自身とは、自然的意識の意識性として自然的意識と実在的知(学)とを媒介する作用

であって、決して両者の単純な結合態ではなく、両者の根源的統一態と考えねばならない。「意識の経験の学」はこのような仕方でのみ学であることが可能なのである。

註

(1) 「絶対的なもののみが真であり、言を換えるとは真なるもののみが絶対的である。」(Hegel, G. W. F., *Phänomenologie des Geistes*, hrsg. v. J. Hoffmeister, 6. Aufl., 1952. 以下 Phä. と略す) 周知の如く、ハイネッカーはこのテーゼのうちを「すでに我々のもとにあり、またあることを意志する絶対者の意志」を読み取る。(Heidegger, M., *Holzwege*, Vittorio Klostermann, 5. Aufl. 以下 HW. と略す。)しかし、ヘーゲルは既に一八〇一年刊行の所謂『差異論文』において次の様に述べていた。「絶対者は探究される目標であるが、絶対者は既に現在している。ちもなければ、絶対者が探究なれるということが一体らかにして可能であるのか。」(*Differenzschrift*, hrsg. v. G.

Lasson, S. 16.)

- (2) Phä., S. 74.
- (3) HW., S. 181.
- (4) Phä., S. 67.

(5) Hypothèse, J., *Genèse et structure de la phénoménologie de l'esprit de Hegel*, Aubier, 1946, pp. 14-15.

- (6) Phä., S. 69.
- (7) Phä., S. 67.
- (8) Phä., S. 67.
- (9) Phä., S. 66.
- (10) vgl. Phä., SS. 63-65.
- (11) Phä., S. 71.
- (12) Phä., S. 71.
- (13) Phä., S. 71.
- (14) Phä., S. 73.
- (15) Phä., S. 73.
- (16) Phä., S. 73.

(福岡工業大学非常勤講師・昭和五十七年本学大学院
博士課程修了・哲学)